

早稲田大学 グローバルCOE 「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」
調査研究支援スキーム 成果報告

所属 アジア太平洋研究科 学年 博士1年 氏名 朴 修慶 (パク・スギョン)

日程 2008年1月29日 ～ 2008年2月4日 (機内一泊)

渡航地 (国・都市名)

マレーシア・ペナン島

リサーチ目的

本リサーチは、日本と韓国からの、マレーシア・ペナンで引退移民者として老後を送っている高齢者とのインタビューを通じて、第一、東南アジア地域への引退移民の選択理由、第二、実際の日常生活の中、現地の地元の人々との交流等の現状、第三、高齢という年齢から海外異文化への適応ストレスの有無、等の状況・実態を把握・分析することを目的としている。これを受け、さらなる高齢化とグローバル化に備えるために、高齢者の生活の自立を図る上で、現地の人々との交流などを促進することで、高齢化から齎す諸問題の解決及び社会・文化レベルのアジア地域国家間の理解と協力を図ることを目的としている。

日本では「年金移民・海外ロングステイ」、韓国では「引退移民・Gray 移民」などとして知られているが、一般的に引退移民とは、定年・引退した後、海外で老後を送ろうと、他の地域へと移住することを指している。しかし、本研究における「引退移民」とは、会社や仕事の現場から身を退けた高齢者が自分の生活根拠地を国外に移転し、移り住むことである。従って、本研究においては、会社や仕事の現場などから定年、あるいはさらに広い意味の引退をした高齢者が年金を主な収入源として、生活の場所を移転させ、海外で自分の老後を送るという意味から、「引退移民」として定義することになっている。

研究課題

上記のリサーチ目的を踏まえ、本研究の課題は、二つに大別される。

第一、仕事の現場からの引退後、海外への引退移民を選択する高齢者達における「海外」という新しい文化環境の適応ストレス等から齎す諸問題点などを把握し、かかる生活上の問題などの解決を図る。これは、高齢者の自立と、より良い老後生活の質を向上させることによって、海外異文化への適応度を高め、心理的な福祉感（現地生活の満足度・生きがい）を改善・向上させる。

第二、なぜ海外引退移民を選択したのか。また、海外移住地として多様な地域が候補地として上げられるが、東南アジア地域（マレーシア・ペナン）を選択した理由を把握する。これを受け、マレーシア現地での日常生活の中で、余暇時間の活用方法などを分析し、現地の人々との交流の現状、高齢者の現地における地域社会への参加、教養文化活動などの実態を通じて、東南アジア諸国（現地）の文化・社会への理解の深化を図る。これは、東南アジア地域との経済・政治などの国家政策レベルに先立ち、一般の人々とのレベルでの社会・文化の協力を図ることを目的及び課題としている。

成 果

<概要>

今回の現地における調査は、マレーシア・ペナン所在の Networld Holidays (MM2H ビザの代行業務及び長期滞在者生活サポート・アドバイスする団体)の代表者の理解と協力を得て、引退移民を計画している方のオリエンテーションに参加 (1回)、日本からの引退移民者とのインタビュー (3回: 70代カップル/60代カップル/50代カップル) を行った。また、韓国からの引退移民者に関する情報を得ることが難しく、引退移民者ではないものの、現地で生活をしている一般の移民者とのインタビューを通じて、韓国からの引退移民者などに関する現状と一般情報を得た。

<なぜ、マレーシアへの引退移民を選択したのか>

基本的に引退移民を選択する際、気候、治安、物価、医療施設などが考慮要素として上げられる。今回のインタビューを通して得られた結果として、上記の4つの条件が満たされていることが分かる。

第一、マレーシアは日本と韓国より1年中暖かくて、地震の心配のない。第二、他の東南アジア諸国より、治安が優れている。偶に、外国人を相手とする引ったくりやすりなどの事件はあるものの、マレーシア対日本と韓国のイメージが良好（日本企業のペナンへの活発な進出・韓国現代グループのペナン大橋建設）であることも一助している。第三、マレーシアは日本と韓国より物価が低廉であるため、価格面で魅力的である。かかる点から、カナダ・オーストラリア・ハワイなどの欧米諸国ではなくて、東南アジア諸国への引退移民を選択した大きな理由でもある。第四、高齢者達に最も重要な問題でもある医療施設は、サービスと質の面で満足していることが分かる。また、各病院では日本語・韓国語の通訳のサービスも用意されている。医療費も現地で現金で支払い、日本の国民健康保険で医療費を還付してもらっている。

<現地の地元の人々との交流及び異文化へのストレス、心理的な福祉感>

日本の引退移民者の年齢別（50代・60代・70代）にその特徴が分かれることが分かる。

まず、共通的なことは、「日本人だけ」とのお付き合いに拘っていないことと、日常生活に充実した活動などを行っていることが分かる。50代カップルの場合、一番活発に現地人との交流を深めている。日本での職業を生かしたボランティア活動などを通じて、その収益を地元の人々に還元している上、地元の人々と韓国からの移住者等と共に様々な地域社会活動に参加している。また、60代のカップルは、マレーシアに移住したばかりである事情もあるものの、英会話などの勉強をし始めている上、ボランティア活動などにも肯定的である。それに、移住を決定する前、下見旅行として6回程度ショットステイの経験もあり、その際に現地人との友達が出来て引退移民を選択したほど、現地人との交流も活発である。最後に、70代のカップルの場合は、他の対象者に比べ高齢ということから、現地人との交流は無い方であるものの、週2回の「卓球会」等の活動を通じて、日本人のみならず、韓国からの移住者との趣味活動を行っていることが分かった。

また、異文化へのストレスに関しては、70代のカップル（ハワイでの2ヶ月滞在）を除いて、海外旅行を除いては長期滞在の経験は無かった。英語力は、3組のカップルの中、夫婦の中で一人は日常会話程度の英語力を有しており、地元の人々とのコミュニケーションは大きな問題はない。また、海外異文化によるストレス・拒否感等はないと答えているものの、日本とは違う交通習慣、文化、食事、地元の人々の性格などのことを除けば、文化適応へのストレスは少ないという。

上記のことを踏まえ、3組の対象者は、現地の生活に「やや満足」または「普通」と答えており、日本での生活とは大きく異なる点などはあまり無いと答えている。

<限界及び今後の課題>

第一、インタビューの対象者達はとても協力的であったものの、金銭やプライバシーに関する事項には少々控え目であったため、これに関する十分な情報の収集が出来なかったことが残念である。

第二、ボランティア活動などを通じて地元の人々との交流などを深めている反面、偶には、意図をしないうちに、現地人の職業を奪っていたり、利益が目的となる活動などがあるという。引退移民者と現地人との交流と理解を活性化させるために、その活動への正しい基準と目的意識が必要であろう。

第三、東南アジア地域への引退移民の選択は良好な気候と、低廉な物価ということから分かるように、マレーシアだけでなく、他の東南アジア諸国での引退移民者も同様に考えているのか、さらなる研究が必要である。また、東南アジア地域への引退移民の特徴を分析・把握するためには、欧米諸国への引退移民者との比較も必要であろう。

最後に、本リサーチにおける最大の限界でもあるが、韓国からの引退移民者とのインタビューは行っていないことである。その理由は、マレーシアにおける韓国からの移住者は日本より規模が少ない点と、韓国からのマレーシアへの移住の特徴として純粋な引退移民より、子供の英語などの教育のために移住した40-50代が多いという点等が上げられる。この点は、今後の研究課題として、地域選定の見直しなどを通じて、さらなる研究を行って行きたい。

事業推進担当者確認（署名・押印）

メイン	岡田 茂人
サブ	勝間 靖